

スタインベックの文学 (II) ―『エデンの東』について―

Steinbeck's Literary World (II)

On East of Eden

柿 沼 美 代 子
花 本 金 吾

I

一九五二年に出された『エデンの東』 East of Eden についての評価は必ずしも定っていないようである。『怒りの葡萄』に匹敵する分量の大作であり、その点ではスタインベックの代表作の一つに挙げられながらも、芸術性の完成度という点でかなり疑いを抱く者が多い、ということがその最大の理由のようである。

この小論は、色々な点で『怒りの葡萄』と比較検討されるこの『エデンの東』そのものについて最初に主題と構成の両面から考察を進め、次いでその主題がスタインベックの文学と本質的にどのように結びついているのかを見ることを目的としたい。

『怒りの葡萄』を頂点とする一九三十年代後半から四十年代初頭にかけての諸作品に見られた社会主義的興味ないし同情が、スタインベックの信念や主義から必然的に出たものでなく、時代的風潮に影響されたものである、という考えは既に述べた。(注1) そして彼の本質が最初の作品『金の盃』から一貫して見られる個人主義に立脚した求道者的な姿勢の中にある、と考えていることも前に述べた通りである。

この求道者としてのスタインベックの姿は、『エデンの東』に於て、もっとも明確に、集約

的に読み取れると思う。彼が『天の牧場』や、『トーティラ・フラット』や、とりわけ『知られざる神に』などで見極めた個の人間に対する価値は、『エデンの東』で再び総合的に再吟味される。

この再吟味は、作品の題名からも容易に判断されるように、旧約聖書の物語を枠にして行われる。その枠が創生記中のカインとアベルの物語であるのは、今更いうまでもない。

私が思うには、我々が世の中というものを考える時、言えることが一つあって、しかも一つしかないのではないか。そしてこれが、いつも我々を脅かし、同時によい刺激にもなっているのであって、我々は、絶えず思索し懷疑しながら、真珠のような、薄明の世界に生きているのだ。つまり、人間は、善と悪との網の目に捕えられているのだ―実生活に於ても、頭の中でも、飢餓や、野心や、貪欲、残酷、そうした面に於てばかりではなく、親切をつくし寛容を示す場合に於てすらそうなのだ。これが私たちの言えるたった一つのこと、感情のニュアンスが違い、知性の程度が様々であっても、ひとしくこのことは行われているのだと私は思う。善と悪ということが、私たちが初めて意識に目ざめた時、私たちの世界を織りなしていた、縦横の糸なのであり、同時に、私たちが最後の息をひきとる時、その意識を

〔注〕 本研究は、I章とII章を柿沼が中心になり、III章とIV章を花本が中心になって纏めた。文体的な推敲に当っては、全編を通して花本が中心に行った。

形成しているものもこれなのだ。野原や河や山が、よし、変ることがあろうとも、経済や風習がいかように変革しようとも、このことに違いはない。これ以外、世の中についていえることはないのだ。人間は、一生の間の塵や埃を払い落した後は、ただ一つ、単純な難問が残るだけであろう。「自分の一生は善い生涯であったか、悪い生涯であったか？自分のやった事は、善い事だったのか―それとも悪い事だったのか？」(注2)

とスタインベックはこの作品の第四部で述べているが、この「善と悪についての物語」こそは、『エデンの東』のテーマであろう。善と悪の諸相を、旧約聖書の物語を枠にして描くことにより、人間という存在のすべてを明らかにしようとしたものである。

では、その善や悪が、登場人物の上でどのように現われているであろうか。またスタインベックは、善と悪を出すことによって、一体何を言い、訴えようとしているのか。そして彼がそこに見出した人間の存在とはどんなものであったのか。

II

しかしこうした様々な本質的な問題を考える前に、先ずこの作品の構成について見ておくことが順序であろう。この作品には『怒りの葡萄』の場合以上に多数の人物が登場するが、『怒りの葡萄』と違って、いくつかの家族が最初は一見まったく無関係の状態投入されて話が進行する。しかしこうした幾つかの家族に属する多数の人間が織りなす人間関係の中に主題が存在するとすれば、この複雑な人間模様を一応見ておくことが必要であろう。

この作品は全部で五十五章から成り立ち、それは四部に分けられている。各々の章のほとん

どは更にいくつかの節に細分されている。章のいくつかは、『怒りの葡萄』で効果を収めたカメラ・アイと同じように、この作品の話が進行する時代的背景や、環境を写し出す(しかしこの作品の物語は、別に特定の時代や環境の当然の結果として起るような物語ではない。二十世紀の、特に第二次世界大戦が行われている頃の、サリナス溪谷に於ける或る物語であるのを読者は理解する。しかし、このような時代や環境という特殊性はこの作品の本質とは何の関係もない。いわば、この物語の背景は、いつの時代の何処にでも通用する。従ってカメラ・アイが、物語にぬきさしならない現実性や深さを附与する、という本来の働きをしないばかりか、却って物語の流れを阻害するくらいの役しか果たしていない。『怒りの葡萄』には「時代性」があったからこそカメラ・アイが大きな役割を演じ得たのだが、『エデンの東』の場合には、そのカメラ・アイとコントラストをなすべき時代性がまったくないのである)。さて五十五章のほとんどは前述のように更にいくつかの節に分けられているが、それはこのように多数の人物の行動や思考を同時的に描いていく必要のある作品では、かなりの効果を挙げている。しかし、まさにこの事実が、作品全体としての訴える力を弱めているのだが、これは後でスタインベックの本質を短篇作家と規定しようとする処で述べる通りである。

上述のように多数の人物が登場するが、主要な人物は、九人の子供の父親でありこの物語の筆者の祖父であるサミエル・ハミルトン (Samuel Hamilton) と、トラスク (Trask) 家のアダム (Adam) とその異母弟のチャールズ (Charles)、アダムの妻キャシー (Cathy)、アダムとキャシーの間に出来た双子 キャレブ (Caleb) と アロン (Aron)、及びアダムの召

使いで中国人のリー (Lee)、ということになる。これらの人物の係累や背景が適当に絡み合わされた形で、この物語は進行するのである。

スタインベックは先ず、この物語の多くの事件が起るサリナス溪谷を描き出す。そしてアイルランドから移民して来たハミルトン一家を深い愛情を持って紹介していく。この一家がスタインベック自身の先祖であるのは、いうまでもない。そして彼は、第二章では早くもこの物語の主人公の一人であるアダムを読者に紹介するのである。彼がどのようにして、生れ故郷のコネチカット州からサリナスに移り住むようになったかについては、三章以下七章に至って述べられる。アダムの父サイラス (Cyrus) は、南北戦争に一兵卒として参戦するが間もなく右脚を膝から切断するという負傷で退く。その彼が戦争史を読み、戦争に関するすべての資料、報告を集め、架空のものを作り上げることにより、あたかも実戦の経験を持っているかのような言動をする。やがて他の人たちは彼を戦争の権威者として信じるようになり、同時に自分でもそのような錯覚を持つようになる。遂に死ぬまで彼は実戦の経験豊かな英雄として、ワシントンの陸軍省で責任のある地位にある。このように人をあざむく悪人としての一面があるが、すべてのことを軍隊式原理に基いて運営するのである。この彼にはアダムの外にもう一人の男の子供チャールズがいた。彼は父親に似て善以上に悪を、従って弱さ以上に強さを持った男であって、より多く善良さを、すなわち弱さを持ったアダムとは違っていた。すべての点でアダムより敏捷で、頭脳も体力もすぐれているチャールズは、アダムに対してたよりないものをかばうような愛情をかけるがそれは次第に軽蔑に変わる。このような性格の違いのために二人は何度となく喧嘩を繰り返すが、しかしそれは永遠

の憎しみに変わるほどには強くない。アダムの弱さを補強しようとした父サイラスは、彼だけを軍隊に入れるが、ある意味で人間的な弱さが軍隊の全体主義によって矯正されたとはいいがたい。逆に、暴力に対する徹底的な嫌悪と反抗を抱くようになり、個人主義的になっていく。

父サイラスはやがて莫大な遺産を残して死んでいく。チャールズはその金で益々農場を買い足し、黙々と耕作に精を出す。一方、アダムは怠惰な生活を送り、チャールズと喧嘩しては旅をして歩き、しきりにカリフォルニアへ移住したがる。ちょうどそうした処に、運命の女性キャシーが女郎屋の経営者エドワーズ (Edwards) に大怪我をさせられ、助けを求めて這って来るのである。彼女は第八章で初めて紹介される。彼等の家に辿り着いた時の彼女は、既に自分の両親を放火によって殺し、父親の金を奪い、ボストンに出て、エドワーズの愛を利用し尽している。

一生を通じて彼女を駆り立て彼女を引きずり廻したいろいろな性向は (あるいは性向の欠如は) 生れながらにして持っていたものに違いないと、私は信じて疑わぬ。きっとどこかの平衡輪の目方が狂っていたり、どこかの歯車の割合が違っていたりしたのだ。彼女は他の人たちと違っていた。生れた時からそうだった。(注3)

と述べられ、「精神的怪物」 (Mental Monster) と銘打たれて登場する彼女は、アダムの優しい介抱を受けた時も、彼の大きく深い愛情に包まれた時も、二人の子供の母親になった時も、一度として人間に立ち戻ることはなかった。それどころか、色香も物欲も失せて人生の無常を肌で感じる年配になって、立派に成長した二人の息子に会った時でさえ、彼女はほんの僅かの動

揺しか感じない女なのである。間もなく己れの命を絶とうとする時にさえ、彼女をゆずろうとするエセル (Ethel) を連れ戻して殺そうと企て、そのことに感づいたジョー (Joe) の過去を警察に密告するのである。彼女は人間的な感情を持つことを禁じられたまま遂に自殺してしまう。従ってこの自殺は、良心の呵責に耐えかねた結果でもなく、悔悛の後の行為でもなく、不安と臆病とに疲れ、息をしていくのが面倒になったための低次の行為でしかない (スタインベックが、この作品の主題を Timshell (Thou mayest) という意志の自由におきながら、主要な人物であるこの女性に人間回帰の可能性をまったく認めず、終始怪物として描き通したことは、この作品の大きな欠陥となり、同時にこの作品の価値を低めるものになったと考えられる。このことについては更に後で触れる。)

さて、精神的怪物キャシーと結婚し、幸福の絶頂にあったアダムは、父の遺した金を携えてハミルトン家の住むサリナス溪谷にやって来て、平地の肥沃な土地を手に入れる。その時キャシーは既に妊娠していたが、アダムは妻と、やがて生れる子供のために、エデンの園の建設を夢みて全力を尽し始めるのだ。(とはいっても、キャシーはアダムと式を挙げた後、チャールズと床を共にしているので、生れでる子供がアダムの子供であるという保証はどこにもない。) 先ず、井戸を掘らなければならないというので、アダムはその地で善良な人柄のために多くの人たちに慕われているサミエルを訪ねる。このようにして、今迄別々に描かれて来た二つの家系の人物は第二部、第十三章に至って漸く知り合いになるのである。その後この二家は急速に親しさを増していく。サミエルは、キャシー出産の際には産婆役をつとめて双子をこの世に送り出しただけでなく、一年後になってもまだ名前

をつけられていない双子のために、善意と祈りをこめて聖書の中から名前を選び、一年間も子供を放っておいたアダムを叱るのである。アダムはキャシー出奔後、虚脱状態におちいり、子供の面倒も見ず、完全に自己の内部に退行していったのだった。

こうした父親に「見失われた」双子がとにかく生長を続けていけたのは、善意の召使い、リーの力であった。東洋の知恵を代表するかに見えるこのリーは、あらゆる点で、サミエルの延長線上におかれるべき善意の人で、サミエルの死後は、一人で、アダムの間人蘇生に力をかし、双子キャレブとアロンの健かな成長を助けるのである。(しかし、彼があまりにも穏和で、理想的な人物として描かれているために、逆に彼の実存性を疑いたくなる程影のうすい、観念的な人物になっている。そのため折角の彼の思想が薄っぺらで、説得力のないものになってしまった。『怒りの葡萄』のケイシーが観念的であったことは既に他の機会に触れたが、リーは、彼自身の中にまったく自己矛盾を持たない点で、ケイシー以上に観念的な人物になっている)。

さて、物語の後半に至って、アダムは徐々に人間性を回復していく。完全に回復するのは彼がサミエルの葬式に参列した後、今は淫売宿の女主人になっているキャシー (ケイトと名前を変えている) に会い、彼女が彼の想像していたような立派な徳を持った女性でないことを悟った瞬間においてであったが、回復へ至る長い道は、いうまでもなくサミエルによって準備された。サミエルは双子の産婆役ばかりでなく、アダムの回生のための産婆役まで果たしたのである。

今やすっかり成長したキャレブとアロンは、ちょうどアダムとチャールズの場合と同じように、互いにいつくしみながらも憎み、また憎しみを秘めながらも慕い合う。キャレブが、善より多

く悪を持ったチャールズに近いとすれば、アロンはより多くの善と弱さを持ったアダムに近い。母親の正体をアロンより先に知ったキャレブが、それをアロンに秘密にしておこうとするのは、アロンに対する思いやりであるが、そのアロンを淫売宿にいる母親の元に連れていったのは、「カインとアベルの物語」に見られるように、愛を拒絶された者の嫉妬と憎しみからであり、これは彼の邪悪な一面である。

結局はこのキャレブの邪悪さが、アロンを軍隊の中に逃避させ戦死させる。同時に間接的に父親をも殺す結果になった。アロンの戦死の報にショックを受けたアダムは、やがて死の床に横たわるからである。少くともキャレブの意識の中には、自分が邪悪さによって二人を殺したという罪を重く感じる。

大罪を重く意識するキャレブは、リーに促されて、かつてはアロンの恋人であったが今はキャレブに好意をよせるアブラ (Abra) を呼びに行く。母親に追い払われるが、彼女は裏口から抜け出して来て彼に追いつき、二人が共に罪の子であることを深く認識する。アブラの父親は公金を使いこんだ盗人であり、キャレブは淫売婦の子であることを互いに認めあい、二人とも悪の血を持っていることを意識するのだ。

そしてこの二人はアダムの枕元へ近づく。リーは死にゆく父親にキャレブを許し、祝福を与えるように言う。父親は吐息がもれるようにかすかに唇をうごかして Timshell (= Thou mayest) と言うのである。

III

ところでこのように多数の主要人物が絡み合うこの作品の世界で一体何が起ったというのか。そしてスタインベックが見極めようとした

のは何であったか。

アダム、イヴの最初から悪に彩られた存在である人間とは、一体どんな存在であるのか、そしてその存在に果して救済の可能性はあるのか、という問題がこの作品の主題であるのは、異論のないところであろう。

とはいっても、スタインベックは人間の性悪説を一方向的に信じ込んでいるのではない。サミエルやアダム、それにリー、アロンなどの人物が、あれだけの善を持っているのを見れば、それは容易に肯けるであろう。彼等の持っている善は、彼等の努力によって後天的に獲得されたものというより、むしろ彼等が生れながらにして持っていたものであるからだ。だからこそアダムはキャシーを心の底から愛し、信じるこゝろができたのだし、アロンは悪の権化のような母親を実在として信じられなかったのである。

つまりスタインベックは、善と悪の両方が人間の中に存在することを信じているのである。また同時に、悪が原初的なもので、従ってそれだけ執拗で強く、反面善がその悪によって容易に破壊され易い、もろく、弱いものであることも彼は認識している。この作品は、人間がどのように悪の誘惑に負け、またどのようにその悪から立ち上がるのかという、人間の心の中に於ける善と悪との葛藤の相をテーマにしている。

善と悪とが心の中で占める割合は、人によって違う。同一人物にあっても、時と場合によりその割合に変化は起り得るが……。そしてその割合は、資質的なものにもよるが、また後天的な努力にもよっている。(人間の救済の可能性は、善を指向する努力の大小に多に関係する。)

資質的なものにしる、後天的なものにしる、善を多く秘めている順に主要人物を並べると、サミエル、リーを頂点として、アダム、アロンを通り、チャールズ、キャレブと続き、最後に

ケイトとなるであろう。サミエル、リーに何らかの悪の相を見い出すことは不可能といってもよく、一方ケイトに至ってはほんの僅かの善も見い出せないのである。

サミエルとリーはほとんど聖人の域に近い。溪谷の頂上近くに住むサミエル一家は、子沢山の上、水不足のために豊かな農耕を営むことができず、常に生活は苦しい。それでいて彼は、悪への誘惑を心に感ずることは一度もなく、想像力に富んでいて、新しい発明をしては特許をとるのである。そして渴き切ったやせた土地から谷に降りて行き、アダムを蘇生させようとするサミエルの姿は、モーゼが山を降りる姿を想わせる。彼が高地に住んでいることは、彼が精神的に高い位置を占めていることの象徴となっていると思う。アダムをはじめ多くの人物が、サミエルの死んだ後までも彼を懐しみ、彼から多くを学んだことを口にするのである。リーについてもほとんど同様のことが言えるが、余りに観念的であるために、十分な説得力を持ち得ないのは既に述べた通りである。彼はまさに霞を糧とする仙人を想わせる。

これら二人の人物に救済の必要はない。必要のない地点に彼等は達しているのだ。(彼等二人とキャシーが、矛盾を当然持っているはずの人間の存在を抜け出て、むしろ象徴としての存在として描かれていること、そのことがこの作品の説得力を弱める結果になっている)。従って救済の必要は、アダム以下の人物にあるのである。

チャールズとの関係に於てアベル的存在であったアダムは、キャシー出奔後長い間精神的に死んだ状態にあったが、キャシーの本体を見抜いた瞬間、つまり悪の存在を真正面から受け止める決意をした瞬間に、死の状態から解放される。そして弱かった自分の非を認め、周囲の

者に対する自己の責任を感じるに至る。その時初めて二人の子供との間に愛が目覚め、生に積極的に参加する人間に変わる。

だが彼は所詮人生の問題に於ても常にアベルでしかなかった。生きることが必然的に惹起す責任を耐えていくには、彼はあまりに善人でありすぎ、弱すぎたのだ。僅かに「生」きてはまた「死」んだ状態の中に逃避せざるを得ない。

リーがキャレブに向って、

「あなたのお父さんは、ご自分の奥さんに欠けているものをご自分の中に、拡大した形で持っていると思います。あの方の持っている思いやりや良心は、あまり大きすぎて、むしろ欠点に近いと思うのです。あれがあるためにお父さんは、ご自分の落度が気になって、手も足も出なくなるのですよ」(注4)

と言うが、この言葉はアダムの弱さを的確に言いあてている。

このような人物には、自分が生き抜くことそのものが既に大変なことである。どんなに善や良心があろうとも、その人間があまりにも弱すぎるので、その善や良心を他の人間に拡げていくことは思いもよらないのである。アダムと同様善良で弱いアロンが、悪の発見に戸惑い遂に亡びてしまうのは、宿命的であったが、それだけに悲劇的でもあった。このアベルは、何の精神的な救いも見い出さぬまま若い命を散らすのである。

アダムとアロンに精神的あるいは現実的被害を加えたという点でカイン的存在であるチャールズとキャレブについてはどうであろうか。

読者はチャールズがどのような気持を抱いて死んでいったのか、について何も知らされない。小説の場面がアダムの移住と共に、サリナス溪

谷に固定されるに従って、チャールズは作品の枠外に取り残されてしまう。読者が最後に彼を見るのは、彼が相変らずコネチカットの生家で黙々と農耕に精を出し、時折り肉欲を感じると近くの淫売屋に出かけていた姿だった。そして読者はやがて彼がアダムとキャシーの二人に遺産を残して死んだことを知らされる。彼は異母兄の嫁と通じるにより兄を裏切った罪の意識を少しも感じなかったのだろうか。それとも彼が二人に遺産を残したということに贖罪の意味が込められているのであろうか。彼については知らされないことが多すぎる（こういうところにスタインベックが余り多くの主要人物を登場させすぎた欠陥が見られるのではないだろうか。チャールズを傍役の人物と考えるには、作品の前半で余りにも克明に描かれすぎている）。

主要人物の中でもっとも人間的であるとスタインベックが考えているのは、恐らくキャレブであろう。彼は間接的に父と、弟を殺した点で、まぎれもなくカインに違いない。彼は罪の意識を重く感じながら、アダムのようにかたくなに自己の中に退行することもないし、アロンのように絶望的になって破滅してしまうのでもない。たしかに彼が救われるためには、彼の強さの他に、リーの精神的指導と、父からの許しの証が必要であった。また人間が存在する限り、悪や罪も同時に存在するという、悪の普遍性を認識するために、アブラの存在も必要であった。だがとにかく、彼は悪に強く彩られた現実の重みに耐えていこうとするのである。それに耐えていくことこそ贖罪の道であると認識するのである。

ところで或る者は精神的にあるいは現実的に亡び、或る者は生き残るのはどうしてなのか。また、そのこととこの作品に繰返し述べられる

Timshell (=Thou mayest) の思想とはどう結びつくのであろうか。

亡びて行く者に共通の資質は、一言でいうと「弱さ」であろう。彼等は人間の善良さだけを見ようとし、敢て悪を凝視する勇気がなかった点で、「弱い」のだ。人間が悲しくも根元的に悪と離れがたく結びついた——というより悪をその一部に持った存在であることを、認めようとしぬ理想主義的な潔癖家なのである。

人間の悪を非と認める良心は尊いし、必要である。この良心が人が救われるための第一の条件である。だがそれだけではない。それだけであるなら、アダムやアロンでしかない。キャレブの認識に至るには、その外に悪を認めた上でなお生き続ける勇気、努力が必要なのである。

勇気を持つか持たないかは、恐らく生れながらの資質に関係している以上に、各個人の意志の力に関係しているであろう。つまり、すべては各人の意志の自由に任せられているのである。ここにスタインベックが Timshell というヘブライ語を「意志の自由」を示す語として解釈し、この作品のテーマにする大きな理由が存在する。

このヘブライ語の解釈が創生紀四章の七、

If thou doest well, shalt thou not be accepted? and if thou does not well, sin lieth at the door. And unto thee shall be his desire, and thou shalt rule over him.

(下線筆者)

の thou shalt に関する解釈であるのはいうまでもない。スタインベックは、原典が Timshell であるから thou mayest と解すべきだと考え、そこに人類の救済の道を見つけようとするのである。

母親の中に悪を認め同時にその悪が自分の体内にもあることを知って愕然としたキャレブが、「彼女の出た理由が僕には判るから彼女が憎いんだ。僕には判るんだ——僕の中にも彼女がいるんだから。」と叫ぶが、リーはそれに対して次のように言って彼を制止し、慰める。

「勿論あなたの中にもそういうところはあるでしょう。誰にだってありますよ。しかし、あなたには、それと反対のものもあるんだ。(中略)不精な道をとってはいけない。すべてを血統のせいにして言いがれるのは易々たることです。(中略)どんなことをやろうと、あなたのやることはあなたのせいなんですよ——あなたのお母さんのせいではありませんよ。」(注5)(下線筆者)

これは明らかに、悪と同時に善が人間の中に存在することを認め、善を自己の意志で選び、その責任を自分一人のものとして耐えていくべきだ、ということなのだ。

IV

以上考察を進めてきた『エデンの東』の主題とスタインベックの文学との本質的なつながりについて、簡略に述べなければならない。

『エデンの東』が、一個人としての人間を善と悪を合せ持った存在として規定し、その救済の可能性の追求を主題としているのは、既に述べた通りである。この個への探求は、彼の最初の作品から常に見られたもので、スタインベックの文学の本質をなしていると言えよう。

しかし、人間性が危機に直面した二十世紀に於て、徒らに個の中へのみ沈潜する文学は、古く、また弱い文学といわなければならない。い

ったん個に深く沈潜することは重要なことであろうが、それはどこまでもやがて“I”の世界から“We”の世界へ浮上することを前提としていなければならない。スタインベックの文学は、個の探求には成功したといえるだろうがもっと重要である「個から連帯」へのつなぎ目の処で失敗した。スタインベックの世界は、「個」の世界に限られている、といわざるを得ない。連帯感を意識して書かれたと一見思われる『怒りの葡萄』を頂点とする中期の作品は、このような観点から見ると、スタインベックの性癖にあわない作品であった、といえる。それらの作品が書かれたのには、やはり時代的影響が強かっただろう。『エデンの東』は、スタインベックの長所と短所がもっとも明確に示された作品であると思う。

ところでこの作品の短所とは、断片的には実に見事な物語や情景でありながら、それらが統一的な主題を盛り上げることに必ずしも役立たないこと、そして個に対する追求の姿勢と過去を懐しむ回顧の姿勢が奇妙に同居し、そのためこの作品全体の印象が曖昧なものになっている点、ということができると思う。

最初の欠点については、断片的に美しい描写をあげればきりがない程であろう。殊に過去を回想する場面描写の瑞々しさは、一流のストーリーテラーの腕前を想わせる。しかしこのような駒切れの場面や描写を一つの主題のもとに統一させることができなければ、長篇作家としては失敗であろう。あれほど多数の人物が登場しながら、それらの人物は途中常にか何かを読者に期待させながら、或る者は小説の枠からはみ出し、また或る者は極く簡単に死んでしまうのである。そして読者は、空しい、一種のフラストレーションを感じさせられ、主題の曖昧さを嘆くことになり兼ねない。

だが、このような欠点はこの作品だけに限らない。『怒りの葡萄』などにも同様に見られるものである。それに対して『真珠』や『二十日鼠と人間』などの短篇にみる、見事な統率力を考えると、本質的に短篇作家としてのスタインベックの姿が浮んでくる。しかしこのことはそう軽薄に決める問題ではないであろう。それはスタインベックの本質と深く結びついた問題であるからだ。

次の欠点についてはもともと二人の息子のために自分の祖先のことを書こうと思って(注6)書き始められたこの作品は、過去をなつかしむ姿勢が人間追求という積極的な姿勢を最後まで押しつぶし、主題を曖昧なものにしてしまった、ということである。トラスク家にみる人間性追求の主題とハミルトン家にみる過去をなつかしむ主題とは、遂に統一されなかったのである。

スタインベックの世界が「個」に限られた世界であるとする、次の考察は、「個」への接近がどれほど深くなされたか、という点にむけられるべきだろう。そのためには一九六二年発表の『チャーリーとの旅』が恰好の対象になるであろう。

〔注〕

1. 「立正学園女子短期大学紀要11号」拙稿参照
2. John Steinbeck, *East of Eden*, (a Bantam Book) p. 366. 訳文は野崎孝、大橋健三郎訳、『エデンの東』(早川書房) p. 177 による。以下訳文は同様。
3. *Ibid.*, p. 63 同訳書, p. 83
4. *Ibid.*, p. 395 同訳書, p. 217
5. *Ibid.*, p. 396 同訳書, p. 218
6. Peter Lisca "The Wide World of John Steinbeck" (Rutgers Univ. press, 1958) によれば Laura Z. Hobson の *Tradewinds* (*Saturday Review* — Aug. 30, 1952) に Steinbeck's original plan for *East of Eden* was to set down in story form for his two small sons the full record of their ancestors from the time they moved westward to Salinas Valley just after the Civil War. とあるという (p.262)。